

【令和を変える！関西の発想力】「大阪いちごサイダー」の心意気 コロナ禍で追い込まれた農家のいちごを買い上げ開発、飲食店の売り上げにも

2021.1.28



「大阪いちごサイダー」で農家を救った能勢酒造の子安社長

長引くコロナ禍で混迷度を増す日本経済。しかし、コロナ禍だからこそ生まれたヒット商品もあります。

大阪北部の能勢（のせ）町で誕生した「大阪いちごサイダー」もそのひとつ。昨春の緊急事態宣言時、300年もの歴史を誇る「能勢酒造」が地元のいちご農家を助けるために開発しました。「地元の農家を放っておけない」と社長の子安丈士さんがみずから指揮を執り、旬を迎えたのに出荷できなくなったいちごを買い上げ、自社技術でサイダーをつくったのです。

この「大阪いちごサイダー」は地元の心を掴み、大阪府からも「大阪産（おおさかもん）」と称する地元ブランド品に選ばれました。特に暑い夏には、いちごのほんのり甘い味が夏バテの体に染みると評判を呼び、大手スーパーやコンビニからオファーが相次ぎました。出荷できなかったいちごが、サイダーとして蘇ったのです。これぞ快挙といえるでしょう。

しかし当の子安さんは涼しい顔。創業以来、何度も未曾有の危機を乗り越えてきた同社の歴史を背景に、「コロナ禍は必ず乗り越えられる」と言い切ります。というのも同社の創業は江戸時代中期の1712（正徳2）年。「生類憐みの令」で知られる5代将軍・徳川綱吉亡き後、新井白石が政治改革「正徳の治」を始めた頃にあたり、富士山の噴火など未曾有の天変地異が相次ぐ中、政治も民の心も荒れたと伝えられています。そんな時代に大阪・能勢で創業した「能勢酒造」は、とにかく地元の人々に美味しい酒を飲んで欲しいと地道な努力を重ね、人々の信用を得ながら長い歴史を築いてきました。その傍にはいつも地元湧き出る銘水がありました。

「300年、会社が生き残ったのは、この銘水のおかげです。この水さえあれば、どんな苦難も乗り越えられます」と子安さん。銘水をさらに地元のために役立てようと、炭酸水の製造にも乗り出しました。すると地元の飲食店がこぞって能勢酒造の炭酸水を使うようになり、酒より炭酸水の製造割合が高くなるほどヒットしました。

こうした努力が評価されて2015年には中小企業庁の「がんばる中小企業・小規模事業者300社」に選ばれ、コロナ禍の昨年も経済産業省から「地域未来牽引企業」に選定されました。酒にこだわらず銘水を生かした地元への貢献が国にも認められたのです。

しかし、コロナ禍の脅威は容赦なく襲ってきました。新年早々、大阪に再び緊急事態宣言が発令され、旬を迎えたいちご農家の売り上げはまた見通せなくなり、炭酸水を納入していた飲食店も厳しい事態に追い込まれました。もちろん子安さんは黙っていません。さっそく農家からいちごを買い上げ、飲食店の売り上げにもつなげようと、さらに美味しい「大阪いちごサイダー」の製造を開始したのです。

その姿には江戸中期から300年間、幕末、戦争、バブル崩壊など何度も危機を乗り越えた歴史と自信がにじみます。「コロナ禍は必ず乗り越えられる」と言い切り、地元の期待を背負う子安さん、次はどんな手を繰り出すのか、楽しみです。

■殿村美樹（とのむら・みぎ） 株式会社TMオフィス代表取締役。同志社大学大学院ビジネス研究科「地域ブランド戦略」教員。関西大学社会学部「広報論」講師。「うどん県」や「ひこにゃん」など、地方PRを3000件以上成功させた“ブーム仕掛け人”。